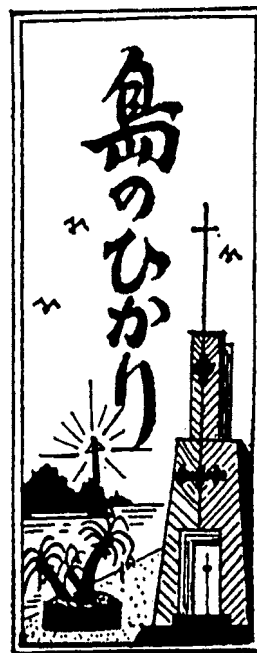




中村長八神父様の列福に向けての講話予定  
10月29日 午前中 (講演 青木 勲 神父)

「島のひかり」ホームページアドレス

<https://shimanohikari.jimdofree.com/>



発行

カトリック浦頭教会  
広報委員会  
五島市平蔵町2716  
TEL 0959-00072  
印刷・(株)才津印刷所

## ふじい

主任司祭 工藤 秀晃

ポーランドで語り継がれている笑い話の一つです。

【ある日、貴族たちが集まって山登りに出かけました。しかし、集まったメンバーは、誰も実際の山登りの経験が無かったため、途中で道を見失ってしまいました。そこで、自分たちが現在いる場所を見出すために、皆で地図を広げ検討を始めました。しかし、あいにくこの貴族たちは皆、学者や知識人だったため、その検討はまもなく喧々諤々の議論へと行って行きました。そして、延々と激しい議論を続けた結果、遂にその知識人の中でも最も賢いといわれるメンバーが、遠くの山の頂を指差しながら誇らしげに言いました。「我々のいる場所が、分かっただぞ。この地図によれば、我々は今、あの山の頂上にいる」と。】

この笑い話は、実は笑えない話です。なぜなら、今この社会には、こうした「地図」という理論の世界だけで考えるあま

り、「現実」の世界に在ることを忘れてしまうという錯誤が溢れているからです。「地図」だけがなんとなく一人歩きをし、ある種のお手軽な仮想空間・バーチャルな世界に浸り過ぎて、昨日も今日もそしてこれからも「神様が共にいてくださる(インマヌエル)」という「現実」をどこかに置き忘れてきつつあるような気がします。様々なことがイベント化され、躍りになってそのイベントをこなすことに終始して、なぜその事柄が行われているか・祝われているのかという本質は見過ごされているように思います。

信仰伝達にかかわらず、何かを「伝える」ということは、究極的には実際に「生きること」・「行動すること」・「自分をさげ出すこと」です。決して机の上だけでできることではありません。自分が今、一体どこに立っているのか、自分の心はどこに向けられているのか、現実にも照らし合わせながら確認してみることがあるのかもしれない。

# 祝!! 工藤神父様

霊名・誕生日

七月二日、二番ミサ内にて工藤神父様の霊名である聖ペトロの祝日と誕生日をお祝いしました。信徒から霊的花束、花束、プレゼントをお渡ししました。また、教会掲示板には小学生が描いた似顔絵がメッセージとともに飾られていました。

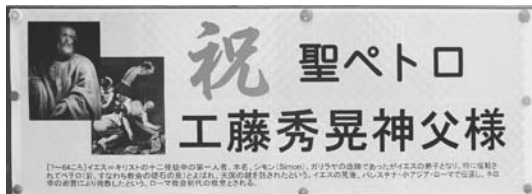
～ お祝いの挨拶～  
ペトロの歌という詩集の中にこうありました。



「わたしは主と良い関係にあつた。主と会話し、主をたたえ、主に感謝したものでした。でも、わたしは主がわたしの目を見なさいとおっしゃっているように感じ不安でした。わたしは主の目を見ようとしませんでした。分かっていました、わたしは怖かったのです。懺悔していい罪のところがめを見出すように思ったのです。ある日、わたしは勇気をふるってついに目を見ました。何の要求もありませんでした。目はただ、こう言っていました。  
「わたしはあなたを愛する」

わたしは外へ出て激しく泣きました。これは復活後に主が過ちをゆるしてくださった愛による涙です。聖ペトロのように過ちを犯したとしても悔い改め、再び立ち上がっていく力を養っていければと思います。  
子供たちにやさしい神父様とわたしたち信徒、ますます分かち合いを深めていけますように。神父様の御健康と御多幸をお祈り致します。

評議会書記 入口 信



**シメオン・アンナ会の作業のもと、きれいななった教会の坂道土手や神羊館まわり。7/2**

今年の工藤神父様の誕生会&霊名の祝日はウィズ・コロナにあつても、まだまだ続くコロナ禍のことも考慮にいれ、役員会・評議会のメンバーに限定され、行われた。  
剪定された木々を見ながら、上ってきた信徒を迎えたのは笑顔の工藤神父様。

夕方六時に始まった会では、神父様が席を順にまわりながら、律儀に一人一人とコミュニケーションをとっていき、微笑みの輪が徐々に広がっていった。

真摯な人柄で、コロナ禍の中でも一歩一歩、着実に信仰の芽を育てられている神父様。

これからも、工藤神父様は小教区が歩むべき道の指針を示しながら歩き続けて欲しいと願う。



## 井持浦ルルド祭

主も待ち望んでおられたように快晴となった五月十四日、四年ぶりに下五島地区井持浦ルルド祭が開催されました。井持浦の地に集まった各小教区の信徒・シスターらは、再び開催された喜びや久しぶりに会えた事もあり、自然と笑顔になって開始時間を待つておられました。

浦頭小教区からは約四十名、全体で約三百名が参加されました。

井持浦小教区議長の開催の挨拶に続き、「ともに祈り」とも



に歩む」スローガンのもと、各小教区役員に担われた聖母マリア像を先頭に聖母行列が続きます。ロザリオの祈りを唱えながら、栄唱時には白い衣装を着た小学生女子による花まきが行われ、道中は色鮮やかな花びらが舞います。

教会まで上がってこられた一同は、各々教会内外の席に着き、ミサ開始を待ちます。ルルドの泉は花まきと聖水により清められ、下五島地区長中田神父様の司式・説教によりミサが執り行われました。説教の中で神父様は、ベルナデッタが掘った洞窟の水は初めは泥水であったが、



汲めば汲むほど清らかな水となった。その後、泉では様々な奇跡が起こり大勢の人の祈りの場となっていた。ルルドとはこの泉の場所だけではなく、家庭や修道院、教会など様々な場所が体験や湧き出でる信仰により「ルルド」になると説かれました。

ミサ後は井持浦小教区信徒の皆様からルルドの水を頂きました。

「また来年も来て下さい」との言葉は、コロナ禍が落ち着きつつある日々の中で改めて、信仰の励みとなるように感じ帰路につきました。



入口里彩さん 小田綺空さん



## 奥浦慈恵院の歴史④

奥浦慈恵院院長 Sr 入口 里子

養育院の養育事業の中で特徴としてあげられることは、0歳から3歳までの幼児が大半で、そのために「院外委託」が多いという事です。母乳の代わりに与えていた「ねりこ」は非常に栄養価が低く、子ども達は栄養失調になりがちでした。そこで会員たちは乳の出る女性を捜し、頼んで子どもを委託しました。常時70〜80%の子どもが院外で養育されていました。院外委託された子どもの中には、そのままその家の養子となった場合もあり、2人あるいは3人も子どもを引き取り養育してくれる家庭もありました。会員たちは母乳を提供できる家庭、委託できる家庭を探すため、奥浦ばかりでなく三井楽、水の浦、玉之浦方面まで足を延ばしています。これは、ほぼ下五島全域に足を運んだこととなります。

この院外委託は他の養育救済事業体でも採用されています。

東京都養育院では、明治18年2月頃、乳幼児の院外委託が行われていました。正式の院外委託は、明治27年7月、院外委託に関する建議を行う事によって始められます。この2つの養育院、奥浦養育院と東京都養育院の院外委託の状況は少々異なっています。東京都養育院は、収容児を受け入れてくれる希望者を募り委託を許可していたのですが、奥浦養育院においては、会員たちが適切な家庭を捜し出していたのです。そのため、東京都養育院では委託先が「自費で養育」していたのですが、奥浦養育院では委託費をその家庭に支払っています。

この違いは地域的なことが大きく関わっています。五島の住民は大半の者が貧困で寄付はもちろんのこと、委託児を自費で養育できるだけの余裕はありませんでした。東京都養育院では、院外委託がそのまま養子縁組に

なっていました。奥浦養育院においては必ずしもそうなるわけではありませんでした。あくまでも「委託」という感が強いように思われます。



明治25年、ペルー師の勧めで「小間物行商」が始められました。

小間物行商は、婦人の髪結い道具や縫い糸、石鹸、反物などを5段重ねの木箱に詰め、風呂敷に包んで背負い、道中の危険を避けるため、丸ゆい、お歯黒と当時の既婚者の装いをし2人組で出かけていました。その目的は、①わずかであったも現金収入を得るため②各地を巡回し

ながら闇に葬りさられようとしている乳児、障害児、あるいは虐待されている子どもを捜して養育院に収容するため③養育院から養子となって養われていった子ども、また、院外委託した子どものその後の状況を知る手段とするためと多目的でありました。この仕事は大正2年まで続けられました。そして、再び昭和4年から昭和12年にかけて「売薬行商」を行っています。薬品は東京、横浜方面から仕入れ、咳止め、胃腸薬、婦人薬などを売っていました。





## 中村長八師に学ぶ(4)

## 宣教師の模範



イエスさまは「行ってすべての人に福音をのべ伝えなさい」と命じられました。私の子ども時代の主任司祭、松下佐吉神父様はこの福音の一節をよく口にしていました。

ところで、長い間、堂崎小教区で司牧し隠居までなさった松下神父様にとっても中村長八神父様は、尊敬すべき先輩司祭だったと思います。

勇敢な中村神父様と体格がよく堂々とした松下神父様は私の中で何か結びつく存在です。

どちらも深い祈りと力強い行動力をもった司祭だったのでないでしょうか。

中村神父様が還暦に近い年令で遠いブラジルに渡ったというそのことだけでも信仰と熱意を感じます。言語の違い、食生活文化、習慣、気候の違いなど多くのお捧げがあったでしょう。

そのような状況を想像させる本人からの手紙の一部を紹介しましょう。どのような困難にもめげない心意気が伝わってきます。

「只今は暑くはあるし、当地の習慣で二食ではあるし、空腹で昼食するため、午後一時ごろには眠気が差すので、目醒ましに『切支丹之復活』を読み居りますが、早、前篇は読み終わり、後篇に移っています。あまり醒め過ぎて、『今日も読み過ぎた』と胸を打つことがままであります。黙想には目下、『心靈修業』の第一巻を使用しています。著者の筆の善く廻りたる所、形容詞の甘く嵌ったる所など感服のほかありません。」

このような便りを読むだけで暑さや野宿、食欲や眠気、すり傷、落馬のけがにもめげない前向きの生き方を感じます。

大河アマゾンを抱く広大な地を宣教のため渡り歩いた長八師に「ブラボー！」と叫びたい気持ちです。一日も早く列福が実現しますように（Sr木口直恵）

シメオン・アンナ友の会  
奉仕作業実施(5月21日)

ミサ後、65才以上の有志が教会に集合。会員数では壮年組に勝つが体力は？ 無理なく怪我なく安全にと会長。浦頭教会・宮原教会・中村神父様の生家の榎木周辺の草刈りと木の剪定とに別れスタート。新型コロナも制限が緩和され、巡礼者も増加し教会美化はグッド・タイムニング。皆も手を動かしつつ安否確認。

教会の庭、マリア様横の剪定での一コマ：想像して下さい。「チヨキチヨキ」作業も終わりとはいきや、皆!! 「アッ!! アア」ハサミは又、一周し写真の通りに!! 剪定のたくみいわく「これで五年は大丈夫!!」そうです！これはXマスに豆電球をのせるのが大変だったのを見すえてのこと。軽トラも大活躍し同時に行われた総会で要望のあった庭の路面の修復も完了。



頂いたお茶は、ほてった体をいやし笑顔のうちに終わることができました。お疲れ様でした。

### 堂崎教会ミサ再開・ 奉仕作業

六月四日、丸三年以上中止していた堂崎教会でのミサが再開されました。板張りの床に正座してみると、改めて足の感覚でも久しく感じました。

また、例年七月第一日曜日の堂崎教会奉仕作業も梅雨の中でしたが天気に恵まれました。年々作業者が減ってきていますが、壮年、女性、シメオン・アンナ会の協力により無事終わることができました。



### 子供・母・父の日ミサ

今年も例年行われている子供・母・父の日ミサ及びプレゼント配布が行われました。準備された各役員の方々ありがとうございました。年齢を重ねてもプレゼントをもらう時には、少々照れくさい気持ちもありますが、同時に感謝の気持ちも生まれてきます。これからも皆が健康でミサにあずかっていきますように!!



ドリンクをどうぞ!

### 小教区評議会 役員変更

青年会 会計 鍋内 怜美

### “ありがと”

次の方々より沢山の御芳志を頂きました。感謝いたします。

長崎市 川口 秀俊様  
名古屋市 土居 照代様

少子高齢化が進む中、皆様方のご活躍のニュース、毎号楽しみに拝見しています。変わらぬご配慮に感謝しています。

沢山の御芳志ありがとうございます。濱口長一様

### ◎椎の木山マリア像 建立25周年にあたって!

平成10年9月、先祖顕彰として建立した大泊椎の木山のマリア像、今年25周年を迎えることになりました。現在は大泊のシンボルとして、また久賀島航路の安全祈願のマリア像として岩場に立続けています。

長崎在住 濱口 長一

### 中村長八神父様を 称えて

### “歌”完成!!

ブラジルで熱心に勧められる中村神父様の列福の為の運動。それを日本側から力強く支える一人である青木神父様の助言のもと、完成された歌が浦頭小教区のコーラス隊に届きました。歌は、浦頭小教区出身の赤尾満治神父様が作曲し、それを元に島のひかり・木口が作詞し、更に音符に合わせ、赤尾神父様が修正し、完成しました。



赤尾神父様が中村神父様のイメージのもと、作成されたCDジャケット

## ひかりの道を

ドミンゴス中村長八神父を称えて

♩ = 92



1. はるかひろがる ははなるだいち ひとすじのみ
2. ふるさとのきに わかれをつげて ほをあげすす
3. うるわしおかに ねむりたびだつ とわのいのち



ち つらぬくひび あつきたましいを うちにひめなが  
む おおうなばら ふかきたにくだり けわしきやまこ  
を うけていきる たえずしゆとともに あゆみをつづけ



ら いこくのたみにみをつくし みとうのちひら  
え みどりのげんやかけぬけし ちちなるみかみ  
て みことばつたえひたむきに はるかなふたつ



き とくはかみのあい きみにひかりのみちを  
の ふとこころにだかれ すすむひかりのみちを  
の くにつなぐあかし めざすひかりのみちを

1. 遥か広がる母なる大地

ひと筋の道 貫く日々

熱き魂を内に秘めながら

異国の民に身を尽くし

未踏の地拓き 説くは神の愛

君に 光の道を

2. 故郷の樹に別れを告げて

帆を揚げ進む大海原

深き谷降り 険しき山越え

緑の原野 駈け抜けし

父なるみ神の懐に抱かれ

進む 光の道を

3. 麗し丘に 眠り旅立つ

永遠の命を 受けて生きる

絶えず主と共に 歩みを続けて

みことば伝え ひたむきに

悠かな二つの 国つなぐ証し

目指す 光の道を



# ふる里だより

4年ぶりの

## バラモンキング

6月18日、4年ぶりの開催となる五島長崎国際トライアスロン大会、バラモンキングが執り行われました。

Aタイプ（スイム、バイク、ラン合計200km）、Bタイプ（スイム、バイク、ラン合計124・4km）。久々の開催という事もあり、全国から768名の挑戦者が参加され、665名の選手が無事完走し、バラキンの称号を得られました。

肉体を限界まで酷使する苛酷なレース、沿道で応援する方々の前を必死で走る、走ろうとする選手の姿に思わず「ギバレ、頑張れ!」との声が上がります。選手も必死の笑顔で「ありがとう」と応じる光景に、胸が熱くなるのを感じました。

来年も挑戦する姿と熱いレース展開を期待したいと思います。

# 大蔵川の畔にて

“ほのかに光る源氏を追って”

子供達は、夕闇に舞い始めた螢をつかまえようと、小川の上に手をさし伸べます。光はたくみに曲線を描きながら、対岸に張り出した枝葉の影へ。

六月三日、数年ぶりに観賞会は浦頭地区の小川にもどって来ました。

五島の源氏螢は日本で最も光るタイミンクが早く新種とも言われる程。珍しいモノです。

今年は少しホタルの数が少なかったですが、それでも子供達は舞い踊る光達に夢中でした。



# 奥中を胸に

五月二十八日にバレー、六月十一日に陸上と五島市中総体が行われました。今年度で奥浦中学校が閉校し、来年度から福江中学校に統合が決定している為、応援する側も声が入りました。日々の練習の成果もあり、バレーは男女とも準優勝。陸上競技も多くの県大会出場となる入賞者が生まれました。



# 編集後記

少子化の波が地域にも及び、短期間の説明の中で奥浦中学校が福江中学校に統合される事になった。

二月中に行われる統合、閉校の式典に向けての準備が実行委員会、式典部会、記念碑部会、記念誌部会で急ピッチで行われ始めた。

来年で、中学校が出来て七十七年、学校には資料として、(一部の年度が欠けた)卒業写真、白黒のスナップ写真等しか残っていないが、それでも過去の時代の雰囲気伝わってくる。

浦頭小教区には、二十五年誌、五十年誌、島のひかりの五十号毎の冊子等、その時々情報が様々な情景と共に確実に残っている。

過去の信仰の有様が確実に分かる資料がある事のありがたさを改めて感じる。

木口 重憲